

投稿論文の査読をめぐる

不満とコンセンサスの不在

太郎丸博

1 査読結果への不満

最近の『社会学評論』や『ソシオロジ』の編集後記を読んでいると、毎回のよう投稿者に対する注文やアドヴァイスがのっている。いわく、ちゃんとチェックしてから投稿しろ、いわく、投稿する前に誰かに読んでもらえ、いわく、ちゃんと審査しているんだから文句は言うな、というぐあいである。もちろん善意でおっしゃっているのだろうが、あたかも、最近の投稿原稿は、ちよつと読み返せば修正できるようなレベルのミスすら修正していない欠陥品ばかりだと暗に言っているようである。似たような内容のうわさ話もよく聞く。「最近の若い者はなつとらん!!」といったレベルの愚痴なので聞

き流そうと思ってきたが、こうも頻繁に一方的な意見ばかりが述べられるのを見ると、投稿者の側の肩を持ちたくなくなる。

確かに私自身の査読の経験でも、卒論でも「優」をつけられないようなひどい投稿論文にめぐり合うことが、まれにある。『社会学評論』や『ソシオロジ』の編集委員ならば、大量の投稿論文をさばくので、そのようなクオリティの低い論文に出合う頻度も高いだろう。中には逆恨みするような投稿者もいるのかもしれない。編集委員もレフェリーもヴォランティアであるから、苦勞ばかりが多いたいへんな仕事である。だから、「もつとちゃんと勉強して、専門家の指導を受けて、文章もよく推敲してから投稿してくれよ」と言いたくなる気持ちにはよくわかる。

しかし、投稿者の側から見れば、また違った現実も見えてくる。私自身「むしろ品質管理に問題があるのは、査読や編集のプロセスのほうではないのか」と思うことがしばしばある。私はこれまで何度も雑誌へ論文を投稿してきたので、累積投稿回数と掲載拒否された回数では、日本の社会学者の中でもトップクラスにはいるのではないかと勝手に思っている。また、最近は大学院生を指導する立場にあるので、彼らが投稿した論文へのコメントを見る機会も増えてきた。それらは信じられないような査読もある。私が二〇〇七年までに経

験してきたひどい査読は、太郎丸博（二〇〇七）にだいたい書いたので、それ以外の事例をいくつか紹介しよう。

ケース1 ある代表性の低いデータを使って論文を書いて投稿したら、レフェリーから「その質問項目ならば、SSMやJGSSの調査票に入っているので、SSMかJGSSのデータを使い」と言われた。ところが、その質問項目はSSMやJGSSの調査票には入っておらず、そのことは論文の注でも書いていたのである。本文にも質問文のワーディングは掲載されていた。おそらくこのレフェリーは、ちゃんと論文を読んでおらず、頭が混乱した状態でコメントを書いていたのだろう。

ケース2 一回目の査読で、レフェリーからはAというキーワードを論文のタイトルに入れると言われたので、言われたとおりに書き直して原稿を送り返すと、今度はレフェリー2から、Aというキーワードを論文のタイトルに入れるな、と言われた。二人のレフェリーはお互いの評価やコメントを知ることができたにもかかわらず、こういう矛盾した要求がなされるのは、前回のコメントの内容を二人のレフェリーが忘れてしまっているからであり、一貫性のないいい加減な根拠で審査がなされていたと思われる。

ケース3 論文を投稿したら、論文は審査に回されず、編集委員長から「自分が審査したところ、完成度が低いから掲

載できない」という返事が返ってきた。この雑誌の規程では、論文は複数の匿名のレフェリーによって審査することになっているのだが、まったく規程が守られていなかった。

思い出すだにはらわたが煮えくりかえるが、こういう「査読」によって論文の出版が数か月遅れ、そのせいで就職に影響が生じることもありうる。投稿者の側の被害は大きいのである。私の限られた直接・間接の経験ですら、これだけあるのであるから、探せばもつとひどいケースもあるだろう。

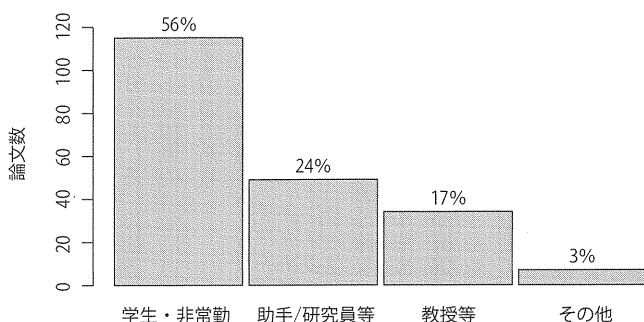
逆に、「甘すぎる」と思われる査読もある。

ケース4 ある数理社会学の論文を査読していたら、計算に誤りを発見した。指摘すると著者も認めて修正したのだが、もう一人のレフェリーは、その誤りには触れず掲載可の判定を下していた。ちなみにこの証明の計算は、 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4}$ のような文字式と分数レベルの計算ができれば理解できるもので、まじめにチェックすれば気づくはずのものである。おそらくはちゃんと計算が正しいかチェックしていなかったのだろう。

いずれにせよ、何やら一方的に投稿する側に問題があるというような論調はやめていただきたいものである。

2 査読されるという不愉快な体験

上記のようなひどいケースではなくても、多くの社会学者が査読を受けて不愉快な思いをしてきたのではないだろうか。その証拠に、安定した職をえた後も、論文を一般投



- 2000、2002、2004、2006、2008年に『社会学評論』と『ソシオロジ』に掲載された一般投稿論文と研究ノートが対象。N = 276。
- 「教授等」は教授、准教授、助教授、専任講師を示す。助手・研究員等は、助教も含む。
- データの詳細については、太郎丸ほか(2009)を参照。

図1 2000 - 2008年『社会学評論』と『ソシオロジ』の一般投稿論文・研究ノート執筆者の身分比率

稿する研究者の比率はごくわずかである。図1は、『社会学評論』と『ソシオロジ』の一般投稿論文・研究ノートの執筆者の身分の比率を示したものである。これは掲載された論文に占める比率であり、投稿された論文に占める比率ではない。また、社会学者全体に占める学生や教授ほかの比率も考慮しないと正確なことは言えないが、いずれにせよ、教授、助/准教授、専任講師といった安定した身分の社会学者は、不安定な身分の社会学者に比べて投稿する率が低いのは間違いない。

査読 (peer review) とは元来、専門を同じくする研究仲間同士の審査のほずであるが、査読付きの日本の社会学雑誌では、一方的に審査する安定した身分の人々と、一方的に審査される不安定な身分の人々に階層が分化しており、ピア・レビューという言葉の元来の意味からは遠く離れた状況になっているのである。

話を元に戻そう。多くの社会学者にとって、査読されることはできるならば避けたい不愉快な体験以外の何物でもないのではないだろうか。だから就職したら、一般書や紀要にはかり論文を発表するようになるのであろう。大半の社会学者は、自らの全身全霊をかけて論文を書いているはずである。それを否定されることは、人格を否定されたも同然である。たとえレフェリーの批判が的を射たものであっても、悲しみはやわらいがないし、その批判が納得のいかないものであれば、

悔しさのあまり夜も眠れない。しかも、議論は編集委員会によって一方的に打ち切られることがあるし、実際に会って議論していればありえないような一方的で横柄なコメントをするレフェリーもいる。投稿者の側は、圧倒的に不利な状況でレフェリーや編集委員会に自分の論文の価値を説得しなければならぬのである。

レフェリーや編集委員の中には、それでも忙しいうちにヴォランティアでレベルの低い論文を読まれて迷惑だと思っている人もいるようであるが、むしろ被害を受けているのは、しばしば投稿者の側なのである。しかも単に忙しいとか面倒だといったレベルではなく、深く深く傷つくことがあることを、レフェリーや編集委員は忘れるべきではない。

3 査読制度への批判

これまでの議論は、世の中にはひどいレフェリーがいるとか、査読されるのはつらいといった話であるが、査読制度そのものを否定するような議論も、これまでしばしばなされてきた。日本の社会学の場合、学術雑誌よりも一般書のほうが重視される傾向があるので、学術雑誌に対する偉い先生の関心が薄いか、査読のバイアスや妥当性について表だって論じられることはあまりないようである。しかし、自然科学系や心理学、経済学などの学問分野では、査読のバイアスについて文字通り山のように議論がなされている（例えば「

Bornmann (2008) を見よ）。バイアスについては、いくつかのタイプが指摘されている。例えば、ジェンダー、エスニシティなどにかかわるイデオロギー的なバイアスが査読に生じているとか、有名大学の研究者や身分の高い研究者の論文が掲載されやすいと論じる研究もある。しかし、本当にバイアスが生じているかどうかを知るためには、その論文の「真のクオリティ」を査読結果とは別に測定し、その真のクオリティとレフェリーの査読結果のずれを調べなければならぬ。しかし、論文の「真のクオリティ」など、査読とは別に測定できるはずもないので、本当の意味でのバイアスを調べるのはすこぶる困難である。

査読研究では、二人の査読者の評価の相関やズレ具合がしばしば検討されている。この種の研究は、因子分析のような枠組みで考えるとわかりやすい。すなわち、一般に査読者が論文の「真のクオリティ」を評価しているならば、査読者の評価と観察されない「真のクオリティ」のあいだには強い相関があるはずである。もしもそうならば、同じ論文を二人の査読者が評価すれば、両者の評価も強く相関するはずである。Bornmann (2008) によれば、じゅうぶん強く相関するという研究もあれば、弱い相関しかないという研究もあり、はつきりしない。近年では因子分析以外にも潜在概念を扱える統計モデルはいろいろあるので、「真のクオリティ」とレフェリーの評価のあいだにどのような関係を想定するかによ

つても、結果は変わってくるようである。

また、M. Spector & J. I. Kitzuse (1977 = 一九九〇) 流の構築主義にしたがえば、そもそも論文の「真のクオリティ」は査読によって構築されるのであり、査読が正しく論文を評価できているかを問題にしても無意味ということになるだろう。むしろ、そのような構築のプロセスを記述せよ、ということになるが、記述しただけでは問題は改善しない。Spector & Kitzuse (1977 = 一九九〇) 自身も、マートンの社会問題の議論を執拗に批判しており、社会学の議論の優劣を判断できると考えているのである。大半の社会学者は、どこかで論文のクオリティを評価できると信じているのである。より公正で適切な評価を求めているのである。構築主義的にいえば、より公正に「真のクオリティ」を構築する方法が知りたいのである。

以上のように、査読制度に対する不満や批判は、さまざまな学問分野で広く渦巻いているのであるが、バイアスの大きさは不透明なままだし、かといって査読に代わる有望なオルタナティブも今のところ見つからないようである。現実的な方向性は、現行の査読制度をよりよいものにする方策を考えることだと私には思える。

4 コンセンサスの不在と査読マニユアル

適正な査読がなされるためには、まずどのような研究成

果に価値があるのかについて、もっとまじめに議論する必要がある。H. A. Zuckerman & R. K. Merton (1971) と L. Hargens (1988) によれば、人文・社会科学では自然科学に比べて投稿論文が掲載不可になる確率が高い。人文・社会科学系の雑誌では七〇～九〇%が掲載不可になるが、自然科学系の雑誌では二〇～四〇%であるという。その主な理由は、研究者間のコンセンサスの違いであると彼らは主張する。人文・社会科学では、どのような論文が優れた研究成果なのかについてのコンセンサスがありませんので、投稿者とレフェリーで判断の違いが大きくなりやすく、そのため掲載不可という結果が生じやすいのであるという。このような評価基準の多様性は、人文・社会科学に活力と革新をもたらす源泉でもあるが、行き過ぎれば無用の混乱を生む。査読で不愉快な思いをして、投稿をやめてしまう人が多いのも、このコンセンサスの不在が一因である。

「社会学者はしばしば「おもしろい」とか「おもしろくない」といつて他人の研究を評価するが、おそらく、この「おもしろい」という言葉にコンセンサスの不在を隠している機能があるであろう。私に言わせれば、おもしろいけれど学問的には価値のない研究はあるし、おもしろくなくても優れた研究はある。何をおもしろいと感じるかは、読む側の知識や経験・好みに大きく依存するので、人によって何をおもしろいと思うかはかなり異なる。社会学者たちが「おもしろい」と

文 献

か「おもしろくない」といって他人の研究を評価するとき、一見、同じ基準で評価しているようであるが、実態はかなり違ったものではないだろうか。それが査読の過程で露呈しているように思える。

確かに、おもしろさは、私たちが研究へと駆り立てる重要な原動力であるし、その他の条件が同じならば、おもしろくない論文よりもおもしろい論文のほうがいいに決まっている。しかし、査読のためには、それと違った基準が用意されるべきである。私にとつての「おもしろさ」を投稿者に押しつけていいとは、私にはどうしても思えないのである。一般に公開する価値のある研究成果と、そのような価値のない研究成果の間の境界線をどこに引くべきなのか、もっと具体的に考えていくべきである。

そのために『社会学者のための査読マニュアル』というものを私個人で勝手に作ろうと思つている。こんなものを作つても、多くの研究者から同意が得られるとは思えないが、少なくとも議論のきっかけにはなろう。また、どのような基準でどの程度厳しく評価したらいいのか迷っているレフェリーもいるはずである。マニュアル化を嫌う社会学者は多いと思うが、査読という権力を飼いならす方法を、私たちはもっとまじめに考えるべきなのである。

Bornmann, L., 2008, "Scientific Peer Review: An Analysis of the Peer Review Process from Perspective of Sociology of Science Theories," *Human Architecture*, 6(2): 23-38.

Hargens, L., 1988, "Scholarly Consensus and Journal Rejection Rates," *American Sociological Review*, 53(1): 139-51.

Spector, M. & J. I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings Publishing (＝一九九〇'村上直之・中川伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築』ラベリング理論をこえて』マルジュ社).

太郎丸博、二〇〇七、「編集後記——論文を投稿すること、審査すること」『理論と方法』二二(一): 一〇五—一八。

太郎丸博・阪口祐介・宮田尚子、二〇〇九、「ソシオロジと社会学評論に見る社会学の方法のトレンツ 1952-2008」: <http://tarohmaru.web.fc2.com/journal.pdf>

Zuckerman, H. A. & R. K. Merton, 1971, "Patterns of Evaluation in Science: Institutionalisation, Structure and Functions of the Referee System," *Minerva*, 9(1): 66-100.

(たろうまる ひろし・京都大学准教授)